
大養徳国金光明寺と東大寺法華堂不空羂索観音像

早稲田大学 児島 大輔

東大寺法華堂不空羂索観音立像は天平時代の傑作と評されながらも、文献および当該期の基準作例を欠くことから、その制作年代や制作事情についてはいまだ決着をみないままである。私は最近、同像が『不空羂索神変真言経』所説に基づき造像された可能性を指摘したが、本発表はこの私見を踏まえ、不空羂索観音像の制作年代と制作事情を明らかにすることを目的としている。

私見によれば、不空羂索観音像は天平18年(746)頃に法華堂へ移入されたと考えられるのだが、通説に従えばこの時期法華堂は金光明寺の一部であったらしく、法華堂を金光明寺の金堂と考える場合には、不空羂索観音像に金光明寺本尊の資格があるかどうか争点になり、法華堂を金光明寺の金堂と認めない場合には、何処を金光明寺の中心と捉えるのか問題となってきた。本発表では後者の立場から、すなわち法華堂を金光明寺の中心とは認めず、別に金光明寺の金堂を想定した上で、不空羂索観音像の造立時期とその意図を考察したい。

『東大寺要録』所載の太政官符により、天平14年(742)までに金鐘寺が「金光明寺」に指定されたことがうかがえ、大養徳国の場合、金光明寺は新造されず既存の寺院を転用したことがわかる。ところで、平安時代後期の史料ではあるが『七大寺巡礼私記』によれば、大和国国分寺たる東大寺の西大門は「国分御門」と称されていた。何故西大門だけが別格の扱いを受けていたのか。これが天平期の状況を踏まえているとすれば、きわめて示唆的であるように思う。西大門が大和国国分寺の正門とされていたのは、同門がかつて大養徳国金光明寺の正門として機能していたことを示すのではなかろうか。そしてここで注目したいのが、平城京のメインストリートである二条大路から西大門をくぐり、そのまま東進した先に建っていた千手堂である。位置から考えて、西大門は当初上院地区千手堂の平城京に面した正門として建てられたのであろう。つまり、千手堂こそが大養徳国金光明寺の中心堂宇だったのである。千手堂が金鐘寺(金鐘寺)、大養徳国金光明寺へと発展し、さらに東大寺へと包摂されていく過程の中で、西大門はそのまま国分寺の正門としての機能を果たすことになったのであろう。上院地区の中心は現存する法華堂ではなく、千手堂であったのである。

さて、千手堂を中心とする金鐘寺は金光明寺に指定された後、程なくして大転換を余儀なくされる。天平17年(745)の平城還都とそれに伴う現在地での盧舎那大仏造立がその原因である。遅くとも天平19年(747)には大仏を造立中の東大寺に金光明寺の中心は遷されたと考えられているが、私見ではその前段階に千手堂を中心とする上院地区において『不空羂索神変真言経』の経説に則して再編がなされたと考えられ、天平18年頃、千手堂には銀製盧舎那仏像が安置され、法華堂には不空羂索観音像が移入されたのである。